

令和2年度後期学校評価

(1) 確かな学力の定着									
重点指標	年度当初の状況	今年度の具体的な取組	対象	アンケート(R2.7月→R2.12月)	評価	分析	後期改善策	学校関係者評価	
言語環境を整え、達成感のある授業を実践する。	<ul style="list-style-type: none"> 考えを持たせる指導をしている。(昨年度12月) ①27%②61% ①+② R1 88% (教員) ○ 昨年度のアンケートでは、「だいたいそう思う」が半数を超えている。 △ 自分の考えやまとめを書く時間の確保ができていない。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の考えや意見を持って、学び合い学習を行い、他からの学びを感じとる。 単元の最初に単元終了後に到達したいゴールの姿を生徒に示すなど、目標を持たせる。 まとめや振り返りなどを自分の言葉で書く。 単元の中で、「深める」場面を設定し、学習内容をより深める。 	生徒	<ul style="list-style-type: none"> 「学校の授業がわかる」(①+②) A:90%以上 B:80%以上 C:70%以上 D:70%未満 R2.12:91%(R2.7:91%) 	A→A	<ul style="list-style-type: none"> ○ ①+②の数値は前期と同じであったが、①「あてはまる」は前期を4p上回った。学校訪問と教科科の研究授業を行い、指導主事からの助言を通して、わかる授業づくりに励んだ。③+④の合計は前期と同じ9%だった。 △ 保護者アンケートでは、①+②が前期より5p下がった。学習内容が難しくなってきた、わからないことが増えてきていると推測される。 	<ul style="list-style-type: none"> 単元のゴールや毎時間の課題を意識させ、個々の生徒に目標を持たせ、達成できたことを教員が認めていく。 自分の言葉で学習内容のまとめや振り返りを書かせることで、理解を深め、達成感のある授業にする。(前期より継続) 学年末に向け、学習内容の集大成となるので、きめ細やかな授業を心がけ、基礎基本を丁寧に指導する。 	<ul style="list-style-type: none"> 1年生は挙手が多く活発である。 授業中に生徒に考えを書かせる場が設定されていた。 グループ学習の中で、自分の考えを持たせてからロールプレイを行う工夫がみられた。 多くの教科に広がるとよい。 	
指導法の改善に向け、教科部会の充実に努める。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教科代表者会の開催、教科部会で話し合っしてほしいことを明確にし、授業改善の協議を行っている。 △ 指導主事を招聘しての研究授業を1学期は4教科で実施した。 	<ul style="list-style-type: none"> 各教科において、主体的・対話的・深い学びについての捉えを明確に持ち、単元計画を立てる。 全教科部会で指導主事を招聘しての研究授業を開催する。「深める」について、研究を行う。 期間を決め、参観のポイントを絞った授業参観をする。 	保護者	<ul style="list-style-type: none"> 「お子さんは、授業がわかりやすいと言っている」(①+②) A:80%以上 B:70%以上 C:60%以上 D:60%未満 R2.12:68%(R2.7:73%) 	B→B		<ul style="list-style-type: none"> ○ ①+②=91%、1学期より継続して、対話的な学び、学び合い学習を工夫して行ってきた。深い学びの場面については、単元の中で複数回以上あるいは毎時間の中に組み込まれるようになりつつある。 ○ 前期を3p上回った。2学期は、新学習指導要領実施に向けて、評価についての動画視聴と、指導と評価の一体化のための読み合わせを行った。3学期は疑問点について要請訪問で学ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> 教科部会で、来年度からの3観点での評価ができるように準備や実践をして、共通理解を図る。 学び合い学習の質を高め、深める場面を探究していく必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 学習の定着のためには学習したいと生徒に思わせることが大切である。
生徒会活動、学校行事、ボランティア活動等の充実に努める。	<ul style="list-style-type: none"> 生徒:学校行事や生徒会活動に積極的に取り組んでいますか。(①②) R1.12:87%(R1.7:90%) 教員:生徒会活動が生徒の主体的活動になるよう指導した。(①②) R1.12:86%(R1.7:76%) 保護者:お子さんは学校行事や生徒会活動に取り組んでいます。(①②) R1.12:85%(R1.7:86%) △ コロナ禍において、先の見通しが持たず、十分な活動計画を立てることができなかった。 ○ 多くの制限がある中で、生徒会役員を中心に、新しい発想で取り組もうと努力している姿がみられる。 △ 生徒の自主性を引き出し切れず、活動に消極的な場合が見られる。 △ 行事などの削減、縮小に伴い、保護者の参観機会が十分確保できなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> 新しい生活様式を踏まえ、アイデアを出し合いながら、生徒の主体性を高める活動を進める。年間計画を基本に、社会情勢や生徒の現状に応じた取組を進める。 積極的に取り組める雰囲気を作り、集団での活動を通して自己有用感を高めていく。 活動内容を発表する場を設ける。(放送、お便り、掲示等)各学年の担当教員が協力・連携し、計画的に委員会活動を推進する。 特別活動部内だけでなく、学習指導部、生徒指導部とも年度当初から連携を取り、余裕をもって活動を生徒に考えさせられるようにする。 学校便り、学年便り、メール配信等を活用し、生徒の活動を保護者に伝えていく。 ネット・ノゲーム・ノテレビデーを周知徹底し、親子の会話時間を増やす。 	生徒	<ul style="list-style-type: none"> 「学校行事や生徒会活動に積極的に取り組んでいる」(①+②) A:90%以上 B:80%以上 C:70%以上 D:70%未満 R2.12:81%(R2.7:77%) 	C→B			<ul style="list-style-type: none"> ○ 前期を3p上回った。学年別でみると、1年生が+9p、2年生が-2p、3年生が+2pである。1年生は、中学校生活にも慣れ、運動会や合唱コンクール等の大きな行事や委員会活動が主体的に行われたことが上昇の要因であると推測できる。 △ 2年生が下降しているのは、昨年度と比較すると制限された行事開催、委員会活動であったからではないか。 	<ul style="list-style-type: none"> 限られた状況の中でも、主体的に取り組めるような仕掛けをする。 取り組みを見える化するために、掲示物を作成し活動の足跡を残したり、多くの生徒に周知する場とする。 タイミングを逃さずに褒め、次への意欲につなげる。
「部活動に係る活動方針に従って活動している」(①) R1.12:67%(R1.7:56%)	<ul style="list-style-type: none"> 「活動時間は平日2時間程度・土日祝3時間程度」(①②) R1.12:85%(R1.7:86%) 「休養日は週2日以上(平日1日、土日祝1日以上)」(①②) R1.12:85%(R1.7:85%) 「休養日は充実している」(①②) R1.12:93%(R1.7:90%) 休養日平均(R1)()内はH30実績 運動部 平日:92日(75) 土日祝:73日(69) 文化部 平日:128日(114) 土日祝:99日(94) ○ 生徒は休養日を充実して過ごしている。 △ 顧問の活動方針に従って活動する意識は向上しているが、十分とはいえない。 	<ul style="list-style-type: none"> 方針等に基づき、適切な実施に努める。 ア 活動時間(通常):平日2時間程度・土日祝3時間程度。 イ 休養日:週2日以上(平日1日、土日祝1日以上)。 ウ 土日祝休養日:年間52日以上設ける。 部活動方針・年間活動計画をHPで公表する。 部顧問は月毎に活動計画及び活動実績を報告する。 意識向上を図る。(学期毎に方針を確認、活動時間や休養日の現状一覧を示す) 活動計画でのチェックに努める 	教員	<ul style="list-style-type: none"> 「部活動に係る活動方針に従って活動している」(①のみ) A:80%以上 B:70%以上 C:60%以上 D:60%未満 R2.12:71%(R2.7:68%) 	C→B	<ul style="list-style-type: none"> □ 前期同様、後期はBだった。 ○ 生徒は休養日は前期に続き守られていると感じており、休養日を充実して過ごしている。 △ 教員の「部活動に係る活動方針に従って活動している」は71%で、前期を3p上回り、C→Bとなった。しかし、週2日以上の休養日の確保は十分とはいえない。 △ 活動時間は概ね守られているが、前期と比べて3p上回った。 			<ul style="list-style-type: none"> 学期毎に方針を確認することや、活動時間及び休養日の現状一覧を示すことを継続し、互いに守るよう意識して指導にあたるようにする。 適宜、人事評価面談等を通じて、適切な活動指導を促す。
「活動時間は平日2時間程度・土日祝3時間程度」(①+②) R1.12:87%(R2.1:7:90%)	<ul style="list-style-type: none"> 「休養日は週2日以上(平日1日、土日祝1日以上)」(①+②) A:90%以上 B:75%以上 C:60%以上 D:60%未満 R2.12:92%(R2.7:93%) 「休養日は充実している」(①+②) A:90%以上 B:75%以上 C:60%以上 D:60%未満 R2.12:95%(R2.7:94%) 	生徒	<ul style="list-style-type: none"> 「活動時間は平日2時間程度・土日祝3時間程度」(①+②) A:90%以上 B:75%以上 C:60%以上 D:60%未満 R2.12:92%(R2.7:93%) 「休養日は週2日以上(平日1日、土日祝1日以上)」(①+②) A:90%以上 B:75%以上 C:60%以上 D:60%未満 R2.12:95%(R2.7:94%) 「休養日は充実している」(①+②) ①のみではR2.12:65%(R2.7:68%) 	B→A	<ul style="list-style-type: none"> ○ いじめ対応では、多数の教員が関わる事案があり、丁寧な情報共有が行われ組織的な対応ができた。特にホワイトボードを用いて「情報の視覚化」がされた。しかし、報告が遅い場面もあり、まだ十分とは言えない。 ○ 聞き取り用紙を活用し、どの先生も生徒に対応できたため、報告・連絡・相談を行う機会が増えた。 △ 生徒指導部会や職員会議で「この時期の生徒指導のポイント」として、生徒指導上、特に注意すべき点を確認し、危機管理体制づくり、迅速な対応に活かしてきた。しかし「アンテナを高くし～」の項目の結果は、高い水準ではあるものの、昨年から変化が見られない。①+②の結果から、①の結果に視点を変える必要がある。 		<ul style="list-style-type: none"> 生徒指導上、情報の共有が必要な場面では、短時間の学年会や打ち合わせを積極的に実施するよう、生徒指導部会、主任会議を通して生徒指導担当者、学年主任に周知する。また、情報共有に特化した学年会の実施の可否について検討していく。 「この時期の生徒指導ポイント」については、生徒指導部会や職員会議でも提案資料に盛り込む等して教職員全体で共有していく。(継続) 今年度の生徒指導対応を通して、各教員が感じた良い点、悪い点を調査し、より詳細な分析を行なう。 		<ul style="list-style-type: none"> 積極的に行い認知を行い対応していることは良い。 いじめ予防のための活動を増やしていく。
「本校の業務改善は進んでいる」(①②) R1.12:86%(R1.7:68%)	<ul style="list-style-type: none"> 時間外勤務月平均 R1 60:21 H30 69:47 時間外平均45時間以下 R1 7人(18%) H30 5人(13%) ○ 職員は意識は向上しており、職員は概ね業務改善が進んでいると感じている。 ○ 時間外勤務時間は3年連続減少している。 △ 月80時間以上の教員が固定しており、時間外勤務が月平均45時間以下の教職員が極めて少ない。 	<ul style="list-style-type: none"> 時間外勤務時間の減少に努める。 「定時退校日」「19:30消灯日」「勤務時間選択日」を活用する。 スクールサポートスタッフを活用する。 ICT支援員の活用等により、業務改善を更に推進する。 時間外勤務の多い職員への支援・指導を継続する。 業務の平準化に努める。 	教員	<ul style="list-style-type: none"> 「時間外勤務の減少に向け努力している」(①+②) A:90%以上 B:75%以上 C:60%以上 D:60%未満 R2.12:94%(R2.7:82%) 「本校の業務改善は進んでいる」(①+②) A:90%以上 B:75%以上 C:60%以上 D:60%未満 R2.12:88%(R1.7:74%) 「スクールサポートスタッフを活用している」(①+②) A:45h以下 B:60h以下 C:70h以下 D:70hより多い R2.4~12:56:04 (R1.4~7:42:57) 			C→B	<ul style="list-style-type: none"> ○ 前期Cから後期Bへと向上した。 ○ 「時間外勤務時間の減少に向け努力している」は94%で、前期を12p上回った。個々に意識の向上が見られる。 ○ 「スクールサポートスタッフを活用している」は88%であり、前期を14p上回っている。2名配置となり、消毒作業の負担軽減への効果とみられる。 △ 「本校の業務改善は進んでいる」は59%で、前期を15p下回っており、新規の取組が少なく、行き詰まり感がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 時間外勤務の多い職員への支援・指導を継続する。 「持ち帰り残業調査」を実施し、実態把握に努め、計画的で効率的な業務遂行を促す。 業務改善につながる新たな取組の計画について、共通理解を図る。

(2) 豊かな心の育成

生徒会活動、学校行事、ボランティア活動等の充実に努める。	<ul style="list-style-type: none"> 生徒:学校行事や生徒会活動に積極的に取り組んでいますか。(①②) R1.12:87%(R1.7:90%) 教員:生徒会活動が生徒の主体的活動になるよう指導した。(①②) R1.12:86%(R1.7:76%) 保護者:お子さんは学校行事や生徒会活動に取り組んでいます。(①②) R1.12:85%(R1.7:86%) △ コロナ禍において、先の見通しが持たず、十分な活動計画を立てることができなかった。 ○ 多くの制限がある中で、生徒会役員を中心に、新しい発想で取り組もうと努力している姿がみられる。 △ 生徒の自主性を引き出し切れず、活動に消極的な場合が見られる。 △ 行事などの削減、縮小に伴い、保護者の参観機会が十分確保できなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> 新しい生活様式を踏まえ、アイデアを出し合いながら、生徒の主体性を高める活動を進める。年間計画を基本に、社会情勢や生徒の現状に応じた取組を進める。 積極的に取り組める雰囲気を作り、集団での活動を通して自己有用感を高めていく。 活動内容を発表する場を設ける。(放送、お便り、掲示等)各学年の担当教員が協力・連携し、計画的に委員会活動を推進する。 特別活動部内だけでなく、学習指導部、生徒指導部とも年度当初から連携を取り、余裕をもって活動を生徒に考えさせられるようにする。 学校便り、学年便り、メール配信等を活用し、生徒の活動を保護者に伝えていく。 ネット・ノゲーム・ノテレビデーを周知徹底し、親子の会話時間を増やす。 	生徒	<ul style="list-style-type: none"> 「学校行事や生徒会活動に積極的に取り組んでいる」(①+②) A:90%以上 B:80%以上 C:70%以上 D:70%未満 R2.12:81%(R2.7:77%) 	C→B	<ul style="list-style-type: none"> ○ 前期を3p上回った。学年別でみると、1年生が+9p、2年生が-2p、3年生が+2pである。1年生は、中学校生活にも慣れ、運動会や合唱コンクール等の大きな行事や委員会活動が主体的に行われたことが上昇の要因であると推測できる。 △ 2年生が下降しているのは、昨年度と比較すると制限された行事開催、委員会活動であったからではないか。 	<ul style="list-style-type: none"> 限られた状況の中でも、主体的に取り組めるような仕掛けをする。 取り組みを見える化するために、掲示物を作成し活動の足跡を残したり、多くの生徒に周知する場とする。 タイミングを逃さずに褒め、次への意欲につなげる。 	<ul style="list-style-type: none"> PTAと連携した「スー作り」など新しい企画があった。花作りや花鉢配布などに加えさらに企画を充実させるとよい。 コロナ禍の中、手探りではあるができる限り生徒に経験をさせるように工夫してほしい。
「学校行事や生徒会活動が生徒の主体的活動になるよう指導した」(①+②) R1.12:85%(R2.1:7:90%)	<ul style="list-style-type: none"> 「お子さんは学校行事や生徒会活動に取り組んでいます」(①+②) A:90%以上 B:80%以上 C:70%以上 D:70%未満 R2.12:86%(R2.7:82%) 	教員	<ul style="list-style-type: none"> 「学校行事や生徒会活動が生徒の主体的活動になるよう指導した」(①+②) A:85%以上 B:75%以上 C:65%以上 D:65%未満 R2.12:94%(R2.7:76%) 	B→A	<ul style="list-style-type: none"> ○ 前期を18p上回った。制限がかかる現状の中で、可能な活動を模索しながら活動できている。 	<ul style="list-style-type: none"> アイデアを出し合い、工夫を凝らした内容を仕掛ける。 先を見通した計画立案、生徒への指示を心がける。 生徒の頑張りをタイミングを逃さずに褒める。 	<ul style="list-style-type: none"> 各種お便り(学校だより、学年だより、生徒会だよりなど)やメール配信を通して、生徒の頑張っている姿を保護者に伝えられるようにする。 	
「お子さんは学校行事や生徒会活動に取り組んでいます」(①+②) R1.12:85%(R2.1:7:90%)	<ul style="list-style-type: none"> 「部活動に係る活動方針に従って活動している」(①のみ) A:80%以上 B:70%以上 C:60%以上 D:60%未満 R2.12:71%(R2.7:68%) 	保護者	<ul style="list-style-type: none"> 「お子さんは学校行事や生徒会活動に取り組んでいます」(①+②) A:90%以上 B:75%以上 C:60%以上 D:60%未満 R2.12:95%(R2.7:94%) 	B→B	<ul style="list-style-type: none"> ○ 全体としては、前期を4p上回った。学年別では、1年は+12p、2年は-2p、3年は変化なしである。特に1年生では、コロナ禍の中での取り組みを評価してくださったのだと推測できる。 	<ul style="list-style-type: none"> 各種お便り(学校だより、学年だより、生徒会だよりなど)やメール配信を通して、生徒の頑張っている姿を保護者に伝えられるようにする。 		

(3) 健全な体の育成

「部活動に係る活動方針に従って活動している」(①) R1.12:67%(R1.7:56%)	<ul style="list-style-type: none"> 「活動時間は平日2時間程度・土日祝3時間程度」(①②) R1.12:85%(R1.7:86%) 「休養日は週2日以上(平日1日、土日祝1日以上)」(①②) R1.12:85%(R1.7:85%) 「休養日は充実している」(①②) R1.12:93%(R1.7:90%) 休養日平均(R1)()内はH30実績 運動部 平日:92日(75) 土日祝:73日(69) 文化部 平日:128日(114) 土日祝:99日(94) ○ 生徒は休養日を充実して過ごしている。 △ 顧問の活動方針に従って活動する意識は向上しているが、十分とはいえない。 	<ul style="list-style-type: none"> 方針等に基づき、適切な実施に努める。 ア 活動時間(通常):平日2時間程度・土日祝3時間程度。 イ 休養日:週2日以上(平日1日、土日祝1日以上)。 ウ 土日祝休養日:年間52日以上設ける。 部活動方針・年間活動計画をHPで公表する。 部顧問は月毎に活動計画及び活動実績を報告する。 意識向上を図る。(学期毎に方針を確認、活動時間や休養日の現状一覧を示す) 活動計画でのチェックに努める 	教員	<ul style="list-style-type: none"> 「部活動に係る活動方針に従って活動している」(①のみ) A:80%以上 B:70%以上 C:60%以上 D:60%未満 R2.12:71%(R2.7:68%) 	C→B	<ul style="list-style-type: none"> □ 前期同様、後期はBだった。 ○ 生徒は休養日は前期に続き守られていると感じており、休養日を充実して過ごしている。 △ 教員の「部活動に係る活動方針に従って活動している」は71%で、前期を3p上回り、C→Bとなった。しかし、週2日以上の休養日の確保は十分とはいえない。 △ 活動時間は概ね守られているが、前期と比べて3p上回った。 	<ul style="list-style-type: none"> 学期毎に方針を確認することや、活動時間及び休養日の現状一覧を示すことを継続し、互いに守るよう意識して指導にあたるようにする。 適宜、人事評価面談等を通じて、適切な活動指導を促す。 	<ul style="list-style-type: none"> 時間と休養日を守って活動する。 生徒自身に考えさせることで短時間でも練習の効果が上がるような指導をしていくとよいのではないか。
「活動時間は平日2時間程度・土日祝3時間程度」(①+②) R1.12:87%(R2.1:7:90%)	<ul style="list-style-type: none"> 「休養日は週2日以上(平日1日、土日祝1日以上)」(①+②) A:90%以上 B:75%以上 C:60%以上 D:60%未満 R2.12:92%(R2.7:93%) 「休養日は充実している」(①+②) A:90%以上 B:75%以上 C:60%以上 D:60%未満 R2.12:95%(R2.7:94%) 	生徒	<ul style="list-style-type: none"> 「活動時間は平日2時間程度・土日祝3時間程度」(①+②) A:90%以上 B:75%以上 C:60%以上 D:60%未満 R2.12:92%(R2.7:93%) 「休養日は週2日以上(平日1日、土日祝1日以上)」(①+②) A:90%以上 B:75%以上 C:60%以上 D:60%未満 R2.12:95%(R2.7:94%) 「休養日は充実している」(①+②) ①のみではR2.12:65%(R2.7:68%) 	B→A	<ul style="list-style-type: none"> ○ いじめ対応では、多数の教員が関わる事案があり、丁寧な情報共有が行われ組織的な対応ができた。特にホワイトボードを用いて「情報の視覚化」がされた。しかし、報告が遅い場面もあり、まだ十分とは言えない。 ○ 聞き取り用紙を活用し、どの先生も生徒に対応できたため、報告・連絡・相談を行う機会が増えた。 △ 生徒指導部会や職員会議で「この時期の生徒指導のポイント」として、生徒指導上、特に注意すべき点を確認し、危機管理体制づくり、迅速な対応に活かしてきた。しかし「アンテナを高くし～」の項目の結果は、高い水準ではあるものの、昨年から変化が見られない。①+②の結果から、①の結果に視点を変える必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒指導上、情報の共有が必要な場面では、短時間の学年会や打ち合わせを積極的に実施するよう、生徒指導部会、主任会議を通して生徒指導担当者、学年主任に周知する。また、情報共有に特化した学年会の実施の可否について検討していく。 「この時期の生徒指導ポイント」については、生徒指導部会や職員会議でも提案資料に盛り込む等して教職員全体で共有していく。(継続) 今年度の生徒指導対応を通して、各教員が感じた良い点、悪い点を調査し、より詳細な分析を行なう。 	<ul style="list-style-type: none"> 積極的に行い認知を行い対応していることは良い。 いじめ予防のための活動を増やしていく。 	
「本校の業務改善は進んでいる」(①②) R1.12:86%(R1.7:68%)	<ul style="list-style-type: none"> 時間外勤務月平均 R1 60:21 H30 69:47 時間外平均45時間以下 R1 7人(18%) H30 5人(13%) ○ 職員は意識は向上しており、職員は概ね業務改善が進んでいると感じている。 ○ 時間外勤務時間は3年連続減少している。 △ 月80時間以上の教員が固定しており、時間外勤務が月平均45時間以下の教職員が極めて少ない。 	<ul style="list-style-type: none"> 時間外勤務時間の減少に努める。 「定時退校日」「19:30消灯日」「勤務時間選択日」を活用する。 スクールサポートスタッフを活用する。 ICT支援員の活用等により、業務改善を更に推進する。 時間外勤務の多い職員への支援・指導を継続する。 業務の平準化に努める。 	教員	<ul style="list-style-type: none"> 「時間外勤務の減少に向け努力している」(①+②) A:90%以上 B:75%以上 C:60%以上 D:60%未満 R2.12:94%(R2.7:82%) 「本校の業務改善は進んでいる」(①+②) A:90%以上 B:75%以上 C:60%以上 D:60%未満 R2.12:88%(R1.7:74%) 「スクールサポートスタッフを活用している」(①+②) A:45h以下 B:60h以下 C:70h以下 D:70hより多い R2.4~12:56:04 (R1.4~7:42:57) 	C→B	<ul style="list-style-type: none"> ○ 前期Cから後期Bへと向上した。 ○ 「時間外勤務時間の減少に向け努力している」は94%で、前期を12p上回った。個々に意識の向上が見られる。 ○ 「スクールサポートスタッフを活用している」は88%であり、前期を14p上回っている。2名配置となり、消毒作業の負担軽減への効果とみられる。 △ 「本校の業務改善は進んでいる」は59%で、前期を15p下回っており、新規の取組が少なく、行き詰まり感がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 時間外勤務の多い職員への支援・指導を継続する。 「持ち帰り残業調査」を実施し、実態把握に努め、計画的で効率的な業務遂行を促す。 業務改善につながる新たな取組の計画について、共通理解を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 持ち帰り残業を減らすための工夫が必要である。

(4) 重点に迫る体制づくり

情報共有に努め、報告・連絡・相談を迅速・着実にし、組織的に対応する。	<ul style="list-style-type: none"> すべての職員が組織的対応、迅速・丁寧な対応に努めたと感じている。 ○ 問題行動等の聞き取りから報告までを1枚の用紙でできるようにしたことで、聞き取りや報告が確実に行われるようになった。 ○ からかいもいじめと捉える雰囲気が確立され、これまでは軽く流されていた事案も学年全体で取り組むことが増えている。しかしながら、すべての事案がそうではないことは課題である。 △ 対応完了の報告がない場合がある。 △ 教職員全体で共通した行動を取っていない事柄がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒指導関係の報告・連絡・相談の集約先を明確にするとともに、どのようなケースで報告等が必要になるのかを年度初めに明示する。 組織的対応が求められるケース(いじめ対応等)について、職員会議等を活用して短時間で研修を行う。 問題行動等の発生時に使用する「聞き取り用紙」を、いつでも誰でも簡単に使用できるよう、設置場所や様式を今後も工夫し、広く活用されるようにする。 教職員の共通行動を徹底するための強化週間等を定期的に設ける。 	教員	<ul style="list-style-type: none"> 「情報共有し、報告・連絡・相談を着実にし、組織的に対応に努めた」(①+②) A:90%以上 B:80%以上 C:70%以上 D:70%未満 R2.12:97%(R2.7:100%) 「アンテナを高くし、問題行動や危機管理に対し、迅速・丁寧・誠実な対応に努めた」(①+②) A:90%以上 B:80%以上 C:70%以上 D:70%未満 R2.12:94%(R2.7:94%) ①のみではR2.12:65%(R2.7:68%) 	A→A	<ul style="list-style-type: none"> ○ いじめ対応では、多数の教員が関わる事案があり、丁寧な情報共有が行われ組織的な対応ができた。特にホワイトボードを用いて「情報の視覚化」がされた。しかし、報告が遅い場面もあり、まだ十分とは言えない。 ○ 聞き取り用紙を活用し、どの先生も生徒に対応できたため、報告・連絡・相談を行う機会が増えた。 △ 生徒指導部会や職員会議で「この時期の生徒指導のポイント」として、生徒指導上、特に注意すべき点を確認し、危機管理体制づくり、迅速な対応に活かしてきた。しかし「アンテナを高くし～」の項目の結果は、高い水準ではあるものの、昨年から変化が見られない。①+②の結果から、①の結果に視点を変える必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒指導上、情報の共有が必要な場面では、短時間の学年会や打ち合わせを積極的に実施するよう、生徒指導部会、主任会議を通して生徒指導担当者、学年主任に周知する。また、情報共有に特化した学年会の実施の可否について検討していく。 「この時期の生徒指導ポイント」については、生徒指導部会や職員会議でも提案資料に盛り込む等して教職員全体で共有していく。(継続) 今年度の生徒指導対応を通して、各教員が感じた良い点、悪い点を調査し、より詳細な分析を行なう。 	<ul style="list-style-type: none"> 積極的に行い認知を行い対応していることは良い。 いじめ予防のための活動を増やしていく。
働き方改革への意識の向上と更なる業務改善を図る。	<ul style="list-style-type: none"> 「時間外勤務の減少に向け努力している」(①②) R1.12:97%(R1.7:87%) 「本校の業務改善は進んでいる」(①②) R1.12:86%(R1.7:68%) 時間外勤務月平均 R1 60:21 H30 69:47 時間外平均45時間以下 R1 7人(18%) H30 5人(13%) ○ 職員は意識は向上しており、職員は概ね業務改善が進んでいると感じている。 ○ 時間外勤務時間は3年連続減少している。 △ 月80時間以上の教員が固定しており、時間外勤務が月平均45時間以下の教職員が極めて少ない。 	<ul style="list-style-type: none"> 時間外勤務時間の減少に努める。 「定時退校日」「19:30消灯日」「勤務時間選択日」を活用する。 スクールサポートスタッフを活用する。 ICT支援員の活用等により、業務改善を更に推進する。 時間外勤務の多い職員への支援・指導を継続する。 業務の平準化に努める。 	教員	<ul style="list-style-type: none"> 「時間外勤務の減少に向け努力している」(①+②) A:90%以上 B:75%以上 C:60%以上 D:60%未満 R2.12:94%(R2.7:82%) 「本校の業務改善は進んでいる」(①+②) A:90%以上 B:75%以上 C:60%以上 D:60%未満 R2.12:88%(R1.7:74%) 「スクールサポートスタッフを活用している」(①+②) A:45h以下 B:60h以下 C:70h以下 D:70hより多い R2.4~12:56:04 (R1.4~7:42:57) 	C→B	<ul style="list-style-type: none"> ○ 前期Cから後期Bへと向上した。 ○ 「時間外勤務時間の減少に向け努力している」は94%で、前期を12p上回った。個々に意識の向上が見られる。 ○ 「スクールサポートスタッフを活用している」は88%であり、前期を14p上回っている。2名配置となり、消毒作業の負担軽減への効果とみられる。 △ 「本校の業務改善は進んでいる」は59%で、前期を15p下回っており、新規の取組が少なく、行き詰まり感がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 時間外勤務の多い職員への支援・指導を継続する。 「持ち帰り残業調査」を実施し、実態把握に努め、計画的で効率的な業務遂行を促す。 業務改善につながる新たな取組の計画について、共通理解を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 持ち帰り残業を減らすための工夫が必要である。